

## 課題×地域のちから 「コミュニティ」の創出

SDGs 全国屈指の先進地である大崎町では、令和4年から放置竹林の資源化モデルに取り組んでいます。このモデルを提案したのは、大崎町地域おこし研究員の田中力さん。田中さんは、広島大学で環境問題を研究し、広島県庁に入庁。広島県庁に在職のまま、慶應義塾大学大学院に入学し、地域おこし研究員として活動されています。提案の理由については、「放置竹林は災害時の通行の妨げや、野生鳥獣による農作物被害に繋がります。農福連携の力で厄介者扱いされている竹に価値を見出したいと思いました。」とお話してくださいました。

放置竹林に着目した田中さんは、先行事例の調査から始め、「放置竹林の竹炭化」、「竹炭を土壌に散布するサツマイモ栽培」、「干し芋生産・販売」と役割を分担し運用することを大崎町の地域住民、社会福祉施設や企業へ提案しました。サツマイモ栽培と干し芋の販売を担当している社会福祉法人愛生会の新平副理事長は、「この資源化モデルは大崎町

## 地域おこし研究員 田中力×大崎町



地域おこし研究員委嘱（右：田中力さん）



愛生会 竹炭散布の様子



竹林整備前



竹林整備後



完成した干し芋「結紡—ゆいつむぎ—」

をとりまく地域課題を解決しつつ、ビジネスとして成立する可能性もあると感じました。」とモデルへの参加理由をお教えくださいました。

実際に、愛生会では、通常100円/1kgで出荷していたサツマイモが、竹炭を散布し、干し芋を作ることで、71円/1kgまで収益性をあげることができました。

放置竹林を整備することで、土壌改良だけではなく、竹林整備・竹炭生産を担当している地域の高齢者や福祉施設の利用者にやりがいや働く意欲を生み出しています。田中さんは聴覚障害があることから、元々障害者や高齢者の働く機会の創出に関心を持っていたそうです。「誰かのために役立つ」ということが大切です。障害者や地域の高齢者が竹林整備という共通の仕事をする中で相互理解につながり、自然と互いが支えあうコミュニティが創出されました。」とお話してくださいました。新平副理事長は、「施設の利用者も取り組みが注目されていることを感じており、一層熱心に農作業しているように感じます。干し芋販売に携わる利用者も、一生懸命で誇らしげです。」と作業に対する利用者の姿勢について教えてくださいました。

放置竹林は各地で問題となっています。田中さんは今後、竹の資源化モデルが他地域にも展開され、高齢者や障害者の社会参加と生きがいづくりの場が増えていくことを望んでいます。「健常者と障害者が共通の課題に取り組むことは地域の力を引き出し、新たな「コミュニティ」の創出につながります。誰もが自然と支え合い、「誰もが誰かのために、共に生ききる」そんな共生社会をつくりたいです。」とお話してくださいました。

